

## 平成30年度 第2回岡山県子ども読書活動推進会議（議事要旨）

平成30年10月1日（月）13：30～15：30

岡山県庁分庁舎 606会議室

出席者 相賀委員、大村委員、草木原委員、白神委員、塚本委員、土井委員、  
徳山委員、東委員、藤井委員、湯澤委員

### 1 開 会

### 2 議事運営等に関する申し合わせ

### 3 説 明

（1）第4次岡山県子ども読書活動推進計画策定スケジュールについて

（2）第4次岡山県子ども読書活動推進計画概要について

○第4次岡山県子ども読書活動推進計画の指標はどうするのか。

→指標元の調査において、質問項目の削除、調査の実施頻度の変更、隔年から5年後に変更されるなどしているため、第4次計画の指標は見直す必要がある。ただし、不読の指標は残していきたい。

○前回よりもボランティアの活用が増えている。また、小学生の不読率が下がっていることから、今までの取組が良かったと言えるだろう。

○環境整備が大事。中学生はいくら読む時間があっても、読む本が学校にないと難しい。中学生が興味をもっている本を入れていきたい。そのためには、連携が必要である。また、今までは、借りられる本を50冊に制限していたが、無制限に本を借りられるように変えた。

○「読書好き」や評価指標は、今後どのように考えているのか。

→「読書好き」について、第3次計画では評価指標としては入れていなかったが、子どもたちの読書の状況について説明する上で必要であったため入れていた。第4次計画でも同様に考えている。

→読書が好きか嫌いか、読む冊数は0冊か1冊かについては、議論が分かれる。文部科学省も不読の解消に向けて、1冊読むことを目指している。読書が好きかといった主観ではなく、子ども自身が本を読んだと答えることができるように、0冊をなくすことを目指している。

○中高生の子どもがいる。高校生の子は、本が好きだが、読む時間がない。そもそも学校の3者懇談等で「本を読んでいますか」と先生に言われたことはない。先生は必要性を認識されていないのではないか。

## 4 協 議

### (1) 中高生の不読解消に向けての具体的な取組について

#### 【中高生の不読の現状について】

- 中学校は、朝読書をしている学校が多い。本校は、朝 10 分間毎日読書をしている。学力も気になるので、小学生は、朝の学習を取り入れているところが増えてきているかもしれない。前任の中学校では、書くことに抵抗がある生徒がいたので、良文、良い文章を書き写す時間を読書の代わりに設けていた。朝読書は、学級担任の指導の元で行っている。見ていて、本を手にとらず退屈そうにしている生徒はいない。それは、小学生からの積み重ねや図書館を利用できるような環境やシステムが整っているからだと思う。しかし、不読率は気になる。また、部活や塾、SNS 等で毎日忙しいという生徒たちを取り巻く環境の変化も分かる。
- 高校生について、一番気になっていることは、図書館に来る子と来ない子がはっきりしていることである。不読そのものではないかもしれないが、密接な関わりがあるのではないかと思う。イベントやビブリオバトルを開催して、図書館に来るよう働きかけているが、反応するのは、図書館に来ている子ばかりである。この固定化を何とかしたいが、呼びかけだけでは難しい。中学校の様に朝読書をしている高校もあるが、本校ではしていない。学校のミッションが進学なので、朝読に 10 分時間を取ることは難しい。しかし、図書館に来ない不読者層を何とかしようとするならば、ある程度、先生と連携して本を読まざるを得ない状況を作ることも必要だ。高校生の不読率だが、私の体感としては、もっと多いと思う。高校生の場合は、1 冊本を読むということは難しい。小学生なら、一晩で何冊も読むことも可能だが、高校生はそういう訳にはいかない。
- 小学生については、図書館に行くかどうかの差は、低学年より高学年の方が大きくなっている。
- 小規模校の小学校では、図書委員会の子とその周りの子のつながりで、本や図書館とつながっている。教師からの発信ではなく、図書委員の子が発信するイベントということで、友達づきあいも兼ねて、興味を持っている。
- 高学年になっても図鑑が好きな子もいれば、ライトノベルを好む女子もいる。だからといってライトノベルを大量に入れればいいのか悩むところである。

### 【中高生の不読解消に向けての具体的な取組について】

- 先生の意識が低い。授業でもっとコラボしたり、もっと学校司書を利用したりして、授業に生かしていけばいいのにと、十数年学校に関わっていて感じる。
- 読めない子に限って、何を讀んだらいいか分からず困っている。
- 「読書」＝「小説」と考えている先生も中にはいる。文字が書かれていれば読み物として捉えればよいのに。この調査にも漫画は除くと書いてあるが、良質な漫画もある。
- 図書館に来ないなら、図書館から出て行けばいいのではないか。家の近くに図書館がない子もいるので、学校図書館の存在は重要だ。
- 昔に比べて本の賞味期限が短くなっている。そこを見極めるプロの力が必要だ。いかに学校図書館の本や環境の整備を進めていくかは、学校司書にかかっている。だからこそ、専任の学校司書が必要だ。学校司書がいる学校は、もっと、しっかり活用していくべきだ。今後、学校司書のパート化が進んでいくかもしれない。放課後図書館に行っても、図書館が開いていない、学校司書がいらないのでは、子どもは本を読まないのではないか。
- 図書館は、今後子どもの居場所として、セーフティーネットとなっていくだろう。受け皿としての可能性を秘めている。
- 中高生の前に大人の取組も大事ではないかと思うが、「大人も本を読みましょう」と啓蒙する事例は、他の自治体でないのか。  
→秋田が大人に向けて読書の条例を作っている。
- 玉野市では、商業施設の中に図書館と公民館が併設されている図書館ができた。習い事をしている間や買い物の合間に立ち寄れる図書館となり、利用率が上がっている。少しの工夫で変わる。学校でも同じで、どこかに行くついでに図書館というように、環境の工夫ができれば違うのではないか。
- 就学前の小さい子どもたちは、本が好きである。しかし、学年が上がるにつれて、いつの頃からか本から離れていっている。不読は、「休読」なのではないか。
- 小さい子どもたちは、みんな本は好きだが、図書館に連れて行く親と、全く連れて行かない親の2極化が見られる。移動図書館が来てくれたら本を読むが、わざわざ図書館に行っても本を読まない家庭もある。だからこそ、幼稚園等では、毎日1冊本を読み、みんな平等に豊かな時間を共有できるようにしている。
- 市町村の立場から言うと、やはり環境整備が大事である。どれだけ興味のある本を、子どもの身近な学校図書館に入れることができるか。そのためには、図書館との連携が大事だ。市町村立図書館へは、遠くて行けない子もいる。みんなが利用可能な学校図書館の整備充実が大事である。例えば、クーラーを付けるなど、環境を整えることでも、変わるのではないか。
- 市町村の取組としては、中高生が幼稚園児・保育園児や小学生へ読み聞かせを行う縦の連携も大事である。

- 地元の学区で中高生が小さい子に読み聞かせをする活動を毎年している。とても楽しいようで、高校生になっても、部活を休んで来る子もいる。しかし、そこに来る子は、限定的だ。図書館に来ない子を来させるようにするには、図書館で部活をするのも方法ではないか。
- 例えば、学年を指定して、今は1年生が図書館に行く時間と設定する等、工夫が必要だ。学校は、ゲームもスマホもない。隣の人も本を読んでいるなら、本を読む環境としては適している。子どもたちを読書に近付けていこうと思ったら、学校の先生を本気にさせることが大事だ。
- 公共図書館は、10年ほど前と比べて、小さい子を連れた夫婦連れが増えた。この子どもたちが大きくなると、また変わってくるかもしれない。
- 親から薦められた本を読むのは、小学校の中学年まででそれ以降は、友達の薦めた本を読む傾向にあり、友達は似たもの同士が集まる。小さいうちに読書の幅が広がるような声かけが大事だ。
- 中学生は本を読まされている感覚がある。図書館の利用率や貸出冊数は上がるが、長い目で見ると、本を読む習慣を大人になっても身に付けておくことが大切で、そのためには、保幼小中高の連携が重要だ。
- 校内で図書館の配置を工夫するのも方法だ。図書館が3年生の教室の隣だと、1年生は行きにくい。
- 高等学校では、司書がいるかないかで生徒の利用率が全く違う。人の配置は大事だ。また、課題解決学習で図書館を活用する等、先生と連携して、本や図書館を活用する環境を作っていくことが大切だ。
- 本校では、1学期に学校司書が転勤になり、しばらく次の方が決まらなかった。その間は、本の利用率も下がり、学校司書のありがたみを痛感した。是非、全ての市町村に司書が配置されるように待遇改善をはかってほしい。
- 若い教師は、すぐにインターネットを使って調べてしまう。教師自身が本の良さを知らない。それでは、子どもに本の良さは伝わっていかない。
- 授業で使った本を次の学年に引継ぎするなど、教師が本の良さを知ることが大事だ。
- 公立図書館では、ヤングコーナーの選書を県立高校の生徒に手伝ってもらっている。
- 図書館は、本を読む人しか来ないので、待っているだけでは駄目だ。こちらから出て行くことで、つながりを作っていく必要がある。
- 県立図書館には、本がそろっている。本を貸し出すサービスの周知を図っていききたい。
- ブックリストも県立図書館のホームページにアップしている。しっかり周知していきたい。
- 近年、ライトノベルの人気を利用して、売り出す出版業界もある。決して、ライトノベルが悪いわけではない。中には良質のものもあるので、ライトノベルだからといって線引きするのではなく、広く子どもたちが本に触れられるようにしてほしい。